

【重要無形文化財】

雅樂 宮内庁 式部職楽部 第1巻 ナレーションテキスト

雅楽は、5世紀から9世紀にかけて伝來した大陸の樂舞(がくぶ)と日本列島に古くから伝えられてきた歌舞(うたまい)を源流として、平安時代の王朝文化のなかで完成した伝統音楽です。

数ある伝統音楽のなかで、もっとも長い歴史をもち、平安時代以来、一千数百年の時を超えて今日に受け継がれています。また、国際的な基盤をもつその音楽や舞は、数ある伝統音楽のなかでも特異な位置を占めています。雅楽は現在、宮内庁式部職楽部や由来の古い寺社などで伝承されています。

雅楽には、三つの系統の音楽が含まれています。国風歌舞(ぐにぶりのうたまい)は、日本古来の歌舞(うたまい)で、宫廷や神社の祭祀で奏されてきたものです。管絃と舞楽は、大陸から伝えられた樂舞をもとにして、平安時代に完成したものです。宫廷や寺社の様々な行事で奏され、貴族達の教養としても浸透しました。管絃は器楽合奏、舞楽には舞がともないます。催馬樂(さいばら)と朗詠は、平安時代の宫廷社会で盛んに歌われた歌謡に由来する歌です。

国風歌舞(ぐにぶりのうたまい)は、宫廷や神社の祭祀に、主に野外で奏される歌舞です。日本古来の弦楽器である和琴(わごん)を用い、歌方(うたかた)は、数人からなり、主唱者は笏拍子(しゃくびょうし)を打ちます。伴奏楽器には笛や簫篥(ひちりき)が用いられます。ここでは、天皇即位の大嘗祭(だいじょうさい)で奏される久米舞(くめまい)の一部をみてみましょう。



管絃と舞楽は、中国大陸や朝鮮半島をはじめ、林邑(りんゆう)、渤海(ほつかい)など、各地から伝えられた樂舞をもとにして、平安時代の初期に様式が整えられました。雅楽のなかでもっとも曲目が多く、雅楽の中心をなすものです。中国大陆から伝えられた樂舞は「唐樂」、朝鮮半島から伝えられた樂舞は「高麗樂(こまがく)」といいます。「唐樂」には林邑、「高麗樂」には渤海に由来する樂舞や、日本人が新たに作った演目も含まれています。舞楽では、唐樂の伴奏に舞うものを「左舞(さまい)」、高麗樂の伴奏に舞うものを「右舞(うまい)」といいます。右舞には、唐樂を伴奏に舞う演目も例外的に数曲あります。唐樂を伴奏に舞う左舞は、主に赤系統の装束を身にまといます。代表的な例として「太平樂」の一部をみてみましょう。

唐樂は、器楽合奏の「管絃」でも奏されます。管絃は、平安時代に貴族達自らが楽器を演奏するようになって大成したものです。ここではもっとも広く知られている平調(ひょうじょう)の「越殿樂(えてんらく)」を少しみてみましょう。





高麗樂を伴奏に舞う右舞は、左舞とは異なり主に緑系統の装束を身にまといます。代表的な例として「延喜樂(えんぎらく)」の一部をみてみましょう。「延喜樂」は、高麗樂の様式にならって平安時代の初期に日本人が作った演目です。

催馬樂(さいばら)と朗詠は、平安時代の宮廷社会で盛んに歌われた歌謡に由来します。催馬樂は唐樂や高麗樂の旋律に民謡の歌詞をあてはめたもの、朗詠は漢詩文に特有の旋律をつけたものです。

催馬樂の代表的な例として「更衣(ころもがえ)」をみてみましょう。



東遊は、東国の歌舞を源流にして平安時代初期に完成したものです。賀茂、石清水(いわしみず)八幡など京都周辺の神社の祭祀で奏されてきました。中世に一旦衰退し、江戸時代に古楽譜をもとに復興されました。現在は、宮中の皇靈祭や各地の神社の祭祀で奏されています。

ここでは「求子歌(もとめごのうた)」の部分をみてみましょう。

唐樂の曲目には、管絃と舞樂の両方の様式で奏されるものが多くあります。同じ曲でも、管絃と舞樂ではテンポや奏法が異なります。ここでは先ず管絃の「拔頭(ばとう)」をみてみましょう。管絃は、管楽器、弦楽器、打楽器からなるオーケストラです。「拔頭」は太食調(たいしきちよう)という調子に属し、演奏に先だって「太食調の音取(ねとり)」という小曲が奏されます。



「拔頭」は、林邑樂に由来する演目で、左舞と右舞の二つの様式が伝えられている数少ない演目の一です。ここでは右舞の「拔頭」をみてみましょう。拔頭は「走物(はしりもの)」とよばれる、舞台上を活発に動きまわる舞です。舞人は一人で、襍縫(りょうとう)を身にまとい西域の民族を思わせる独特の面をつけて舞います。管絃の「拔頭」と比べるとテンポが少し早くなっています。

左舞の「太平樂」は、四人の舞人が武具を身につけ甲冑装束をまとめて勇壮に舞う演目です。こうした舞は「武舞(ぶのみ)」といいます。太平樂は三つの楽章からなり、全部で五十分におよぶ長大な演目ですが、ここでは最後の楽章の「合歎塩(がっかえん)」の部分をみてみましょう。舞人の装束は、左舞の特徴を示す赤になっています。





右舞の「延喜楽」は、四人の舞人がゆったりと典雅に舞う演目です。こうした舞は「平舞」あるいは「文舞(ぶんのまい)」といいます。「延喜楽」の伴奏の音楽は高麗楽です。高麗楽では、高麗笛や三ノ鼓が用いられます。舞人の装束は、右舞の特徴を示す緑になっています。

催馬楽は、唐楽や高麗楽などの旋律に、各地の民謡の歌詞をのせて歌うもので、平安時代の宮廷社会で盛んに歌われたものです。伴奏楽器は、管絃と同様のものが用いられますが打楽器は、主唱者が打つ笏拍子(しゃくびようし)のみとなります。催馬楽は、中世に一度中絶したため、現在の催馬楽の曲目は江戸時代以降に復興されたものです。代表的な例として「伊勢海(いせのうみ)」をみてみましょう。現在の三重県にあたる伊勢の海辺の様子が歌われています。



朗詠は、漢詩文のなかから詠ずるにふさわしい対句を抜き出して、旋律をつけて歌うものです。催馬楽とともに平安時代の宮廷社会で盛んに歌われました。伴奏楽器は、管楽器のみで、自由リズムで歌われます。朗詠の歌詞は、三つの句に分けられ、各句の冒頭は独唱されます。ここでは「紅葉」の三ノ句を例にみてみましょう。「紅葉」は、秋の嵐山の情景を色彩豊かに歌ったものです。

雅楽は、その成り立ちの背後にアジア各地の楽舞があり、広範な文化交流の成果があります。また平安時代に大成して以来、一千年を越えて伝えられるなかで、各時代の日本の文化とも深く関わってきました。こうした広大な時間と空間をこえて今もなお日本の文化の一角に、たしかに息づいている、その音楽や舞は、掛け替えのない世界的な文化遺産といえます。

